



中国がわかるシリーズ 44 大都の建設

ライフネット生命保険株式会社
創業者 出口治明氏

クビライ政権では、人種や宗教、年齢に関らず、多言語を自由に操る有能な人材が続々と登用されました。科挙が、一時停止されたのは、試験科目である四書五経は中国人にしか理解できないからという理由でした。高い官職に就くためには、まず、何ヶ国語に通じているかを上申する必要があったのです。思想、信条や宗教によって、迫害を受けた人の数が、相対的には、おそらく、歴史上最も少ない時代でした。異端審問に手を染め始めた西ヨーロッパとは好対照です。物質的な豊かさは勿論の事、精神の高邁さにおいても、当時の東方は西方を圧倒していたのです。

クビライは、軍事力より経済力を、生産より流通を、宗教や(朱子学のような)理念より合理性や実践力を明らかに重視していました。モンゴルは、中国文明に染まらなかったほぼ唯一の征服王朝でした。しかし、儒教は奨励され、孔子の子孫は手厚く遇されました。各地の役所には、儒教の経典などが配布され一般に供されました。モンゴルは、アカイメネス朝やイスラーム帝国以上に、伝統文化の保護にも異様に熱心な王朝だったのです。残された多くの碑刻がそのことを如実に物語っています。

1267年、クビライは燕の故地に、新都を設けるべく、大都の建設に着手しました。中国の長い歴史の中で、「周礼」の規定通りにゼロから新しく造営された首都は、大都が唯一の例です。鼓楼と鐘楼も初めて造られました(わが国の天守閣の祖形であるという説が出されています)。また、大都は、中央部の湖水地区から運河を通じて海に直結する都市でもありました。泉州に運ばれてきた西洋やイスラームの商品は、慶元(寧波)、直沽(天津)を経由して、大都に持ち込まれたのです。こうして大都には世界の物品が溢れ、その繁栄ぶりはイブン・バットゥータやマルコ・ポーロ(と呼ばれる誰か)の記述によって、世界に伝えられました。

大都は、冒険的な商人にとって、憧れの都となったのです。コロン(コロンブス)が目指したのも、実はインドではなく大都(カン・バリク)だったのです。なお、大都の建設に伴い、クビライの本拠、開平は上都と呼ばれる夏の都(避暑地)となりました。この構図は、大清にも持ち込まれ、北京が冬の都、熱河(承德)の避暑山荘が、夏の都となったのです。大英帝国治下のインドのデリーとカシミールの関係もこれに近いものがあります。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

1269年、クビライは、チベット僧パスパに命じて、世界中の言語を書き記すことのできる表音文字（パスパ文字）を創らせました。パスパ文字は、ジオットの絵画やわが国の16世紀の印章などにもその足跡を残しています。

1271年、クビライは国号を大元（ウルス）と決めました。これは、モンゴルの崇める天（テングリ）を意味する「乾元」（易経）から採られたものです。これまでの中国の王朝は、概ね、創建者が前の王朝から与えられた爵位をもって国号としてきました。例えば、劉邦は、項羽から漢王に任じられました。また、李淵は[北]周の唐国公の家柄に生まれたのです。つまり、国号は他称であったのですが、クビライ以降、国号は自称（大明、大清）となっていきます。年号（至元）国号（大元）国都（大都）、全ては、クビライの頭の中で、一体のものとして構想されていた感じがします。なお、大元ウルスを、元と呼ぶのは、大韓民国を韓国と呼ぶようなものです。

「マルコ・ポーロと呼ばれる誰か」、ジェーノヴァとの海戦で捕虜となったヴェネツィア商人、マルコ・ポーロは、ジェーノヴァの獄中で、ピサの冒険作家ルスティケロに、「世界の驚異」と呼ばれる書物を口述した、と云われています。これが、「東方見聞録」です。わが国では、日本（ジパング）を初めて西欧に紹介した書物として広く知られています。大都や上都、杭州、また、特にクビライの宮廷に係る記述は正確で、直接、クビライに接した人間でなければ描けないような情報が盛り込まれていますが、マルコ・ポーロの名は、漢文や実質的なリング・フランカであったペルシア語などの資料には一切出てこないのです。一方、クビライの宮廷に伺候した西欧人の名は、ほぼ総ての記録が残されています。従ってマルコ・ポーロの実在は、現在のところ確かめようがないのです。